

大豆で吸実性カメムシ類、フタスジヒメハムシの 増加が懸念されます！

ホソヘリカメムシ等の吸実性カメムシ類（写真1～3）は成虫、幼虫ともに大豆の子実を吸汁加害します。特に、子実肥大中後期（開花40～50日後頃）の加害は、品質を大きく低下させます。

8月中旬の大豆ほ場における見取り調査では、吸実性カメムシ類は平年並の発生でしたが、8月第4半旬までのフェロモントラップによるホソヘリカメムシの総誘殺数は、平年並から多い状況で推移しています（表1）。

フタスジヒメハムシ成虫（写真5）は葉、莢等を加害します。特に、莢の食害痕から雑菌が感染し子実が黒く変色する黒斑粒（写真6）は機械選別が難しい被害粒です。

8月中旬の大豆ほ場における見取り調査では、フタスジヒメハムシが過去10年間で最も多く見られました（平年比250%：ほ場率、平年比500%：株率）。

向こう1か月の平均気温は高いと予想されることから、今後吸実性カメムシ類及びフタスジヒメハムシの増加が懸念されるため、子実肥大後期（開花50日後頃）まで薬剤（表2）による防除を行きましょう。

特に今年度は、ほ場ごとに生育にバラツキが大きいため、生育状況を良く確認し、防除適期を逃すことのないよう注意しましょう。



体長：14～17mm

写真1 ホソヘリカメムシ成虫



体長：9～11mm

写真2 イチモンジカメムシ成虫



体長：12～16mm

写真3 アオクサカメムシ成虫



写真4 吸実性カメムシ類による子実の吸汁痕



体長：3～3.4mm

写真5 フタスジヒメハムシ成虫



写真6 フタスジヒメハムシ成虫による被害と黒斑粒

表1 フェロモントラップ調査によるホソヘリカメムシ総誘殺数
(5月第1半旬から8月第4半旬)

市町名	発生程度	R2 (2020)年 (頭)	平年値 (頭)	平年比 (%)
宇都宮市	平年並	53	77	69
栃木市	多	187	57	331
日光市	やや多	133	91	146
那須塩原市	多	74	25	300
さくら市	やや多	14	9	149
益子町	多	15	5	310
芳賀町	多	124	65	192

※宇都宮市と栃木市の平年値は、平成22(2010)～令和元(2019)年の10年平均
 芳賀町の平年値は、平成25(2013)～令和元(2019)年の7年平均
 その他4地点の平年値は、平成26(2014)～令和元(2019)年の6年平均

○防除対策

- ・開花期の15日後頃から、子実肥大後期(開花50日後頃)まで、薬剤を10～14日間隔で散布する。なお、子実肥大中期(開花40日後頃)のカメムシ類による吸汁害は、減収及び品質低下が大きいので、9月も継続して防除を行う。
- ・薬剤散布の際は、薬剤が莢によくかかるよう散布する。
- ・カメムシ類の発生が多い場合は、散布間隔を短く、散布回数を多くする。

表2 大豆のカメムシ類とフタスジヒメハムシに登録のある主な薬剤
(令和2(2020)年8月12日現在)

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	RAC コード
ダントツフロアブル	2500～5000倍	収穫7日前まで	3回以内	クロチアニジン	ネオニコチノイド	I:4A
スタークル液剤10 スタークルメイト液剤10	1000倍	収穫7日前まで	2回以内	ジノテフラン		
トレボン乳剤	1000倍	収穫14日前まで	2回以内	エトフェンプロックス	ピレスロイド	I:3A
ダイアジノン粒剤5	カメムシ類:4～6kg/10a フタスジヒメハムシ:6kg/10a	収穫30日前まで	4回以内	ダイアジノン	有機リン	I:1B

※RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

詳細は、農業環境指導センター(TEL 028-626-3086)までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「農政部ツイッター(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ(<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>)でもご覧になれます。